

名古屋の地形 3 熱田台地の坂道と湧水・用水

(1) 熱田台地と熱田層

名古屋は台地の街と呼ばれ、ゾウの鼻の形をしていると表現されることもよくあります。この台地は熱田台地と呼ばれ、名古屋城を北端として熱田神宮や本星崎の付近まで広がっています（図1の淡黄色部分）。この台地は大曾根から鶴舞にかけて少しくぼんでいますので、東側の部分を御器所台地や笠寺台地のように分けてよぶ地理の研究者もいます。しかし、後で述べますが、熱田層と呼ばれる同一の地層からできていますので、全体を熱田台地と呼ぶことが一般的です。

名古屋を含めた尾張西部の広い地域は、西にある養老山地の東縁を境する養老断層によって西～南西に傾いています（濃尾傾動といいます）。熱田台地もその影響を受け南西に傾いており、台地の南西縁付近は数mで、北東縁では30m近くの高さになっています。図2は熱田台地の地形東西断面です。堀川～栄、千種～今池、金山付近、高辻～桜山間の高台が熱田台地です。

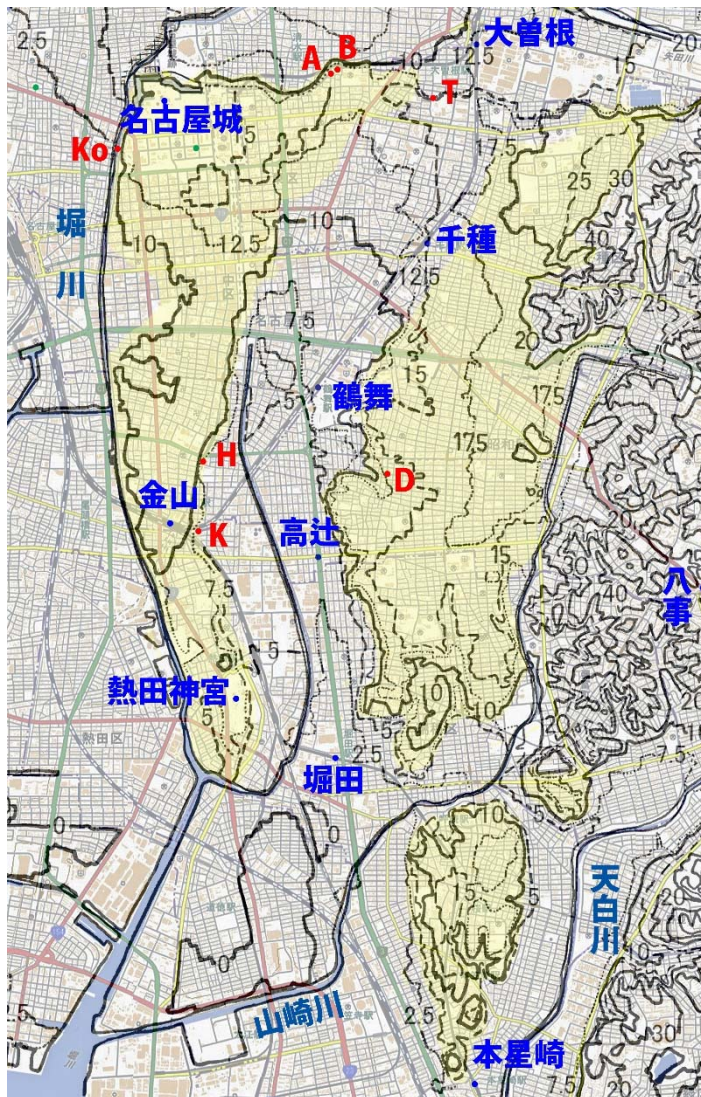
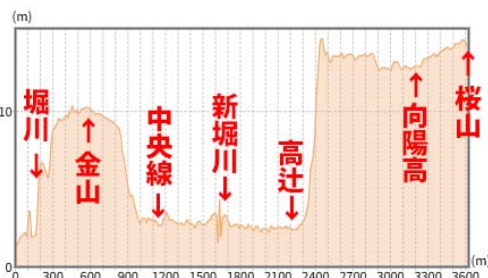
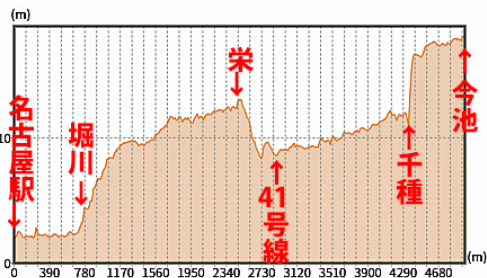


図1 熱田台地（熱田層）分布地域（淡黄色部）→地形図は地理院地図を使用。等高線図は土地利用図から抽出して作成



←図2 地形断面図
地理院地図から作成

熱田台地は 12～13 万年前の海岸平野とその沿岸の海底が隆起してできた小高い段丘面（中位段丘）です。その台地の上に名古屋城や城下の街並みがつくられました。会報の前号でも紹介したように、城下町では珍しく碁盤目状のきれいな街ですが、熱田台地のほぼ平坦な地形が影響していたと思わ

れます。ただし、初めから平坦だったわけではなく、加藤清正が、山を削りその土で谷を埋めて平地にしたといわれます。現在の伝馬町通本町の交差点あたり（札の辻）には峠があり、多くの街道の起点となっていました（会報 89 号参照）。

熱田層は、15 万年前から 4 万年前（いろいろな考えがあります）に堆積した地層で、上部と下部に分けられます。下部層は主にシルト層や粘土層で海生の貝化石を含んでいます。現在、地表で見られる熱田層は上部層のみで、黄緑色の砂層を主とし、数枚の粘土層を挟んでいます。また、御嶽山噴火に伴う Pm I（10 万年前）とか On-Tt（8.6 万年前：以前の Pm III）と呼ばれるテフラ（軽石や火山灰など）層を含んでいます。木曾川によって運ばれてきたものです。上部層は浅海～海浜または三角州などに

堆積した地層です。熱田層は市街地では工事の時くらいしか見られませんが南区の地域では少し見ることができます（図 3）。



図 3 熱田層（南区粕島公園）



図 4 熱田層（中区景雲橋北）

（2）熱田台地周辺の坂道

熱田台地の西縁はほぼ堀川に沿っており、左岸（東側）が右岸より高くなっているのを見ることができます（図 5）。以前に TV 番組の撮影で案内したことがありますが、写真よりは現地で観察する方がわかりやすいと思います。近年は護岸の工事でわかりにくくなってきています。また、JR 中央線の駅（線路）の高さからも地形が推測できます。



図 5 堀川小潮橋北（右側が左岸）

かつては台地の北側と西側は大半が湿地でした。その台地の周囲は坂道があり、以前よりはなだらかになっていますが、歩いてみると今でも多くの場所で熱田台地周辺の坂道が見られます。有名なところでは坊が坂（図 6）や尼ヶ坂（図 7）があります。その他の地点を図 8～図 11 に紹介します。



←図 6 坊が坂（図 1 B）↑図 7 尼ヶ坂（地点 A）

熱田台地を東西に 2 分する低地は、古庄内川か古矢田川が熱田台地を 5～6 m えぐったところで、

大曾根層と呼ばれる砂礫層です。大曾根層も北側の低地よりは高いため、坂道が見られます(図 11)。



図 8 上 金山 (地点 K)



図 9 中 台町一丁目 (地点 D)



図 10 右 東別院交差点東 (地点 H)

(3) 湧水と用水

台地の上につくられた街は水を得ることが困難なところが多いのですが、名古屋城下は豊富な水が得られたといわれます。水は井戸からや、崖からの湧水から得られたようです。両者とも現在はほとんど見られませんが、確証は得られませんが、熱田層に含まれるシルト～粘土層が原因と考えられます。熱田層上部は主に粗粒～細粒の砂層で透水層ですが、連続が悪い厚さが 2-3m の 3 枚 (2 枚?) の粘土層があることが知られています。この粘土層が不透水層となって地下水をためていると考えられます。名古屋城天守閣内の井戸は 20m ほどの深さだったことからそのくらいの所に帯水層があったと思われま



図 11 徳川美術館西 (地点 T)

す。先日、名古屋城内にあったといわれる 6 つの井戸を見に行ったのですが、天守閣内のもの以外ではふさがれていた井戸跡が一つあっただけであとは埋め戻しされたようです。

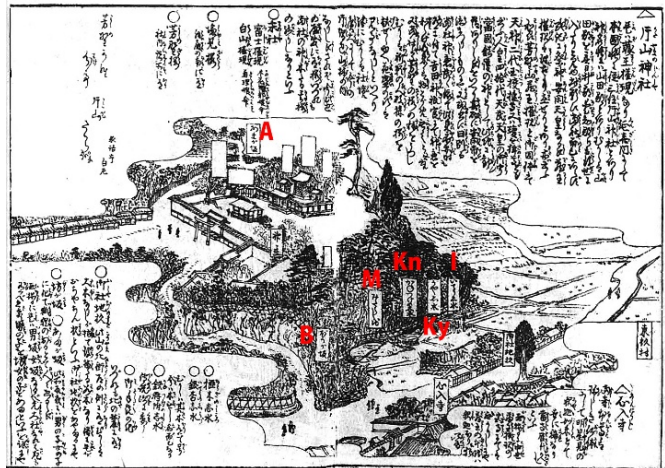


図 12 片山神社付近の湧水 (URL1 に加筆)

坊が坂 (図 1 B) の下付近には、かねつけ志水 (図 12 Kn)、かや志水 (図 12 Ky)、いちよ

う志水 (図 12 I)、みたらし志水 (図 12 M) などが見られ、地下の帯水層からの水が湧き出したと考えられます。尾張名陽図会では三名水として亀尾志水 (国道 41 号線清水交差点の西)、清寿院 (廃寺) の柳下水、蒲焼町 (錦通り伊勢町交差点辺り) の扇風呂の井水が挙げられています。台地上を流れた河川として紫川が知られています。名古屋市科学館の北東あたりから伏見通りを通り若宮大通りを経て堀川に注いでいたようです。地下からの湧水でできた鳴瀬ヶ淵が水源といわれます。大須にあった遊郭にいた大勢の女性が朝に洗う白粉で溝川は白くにぎり、小川を通して、紫川に流れていました。このため、この付近を白川と呼ぶようになったそうです。

1609 年に名古屋城ができたあと、城や城下町への物資 (米、海産物、木材など) の運搬路、ある

いは排水路の目的で堀川がつくられます。街が大きくなるにつれて湧水も減っていき、堀川の西側の井戸の水質も悪くなったようです。1660年に万治の大火が起こります。井戸の水も、お城の堀の水も減っていたと思われます。防火帯として、広小路が設けられました。これをきっかけとして水を確保するために、1663年に守山区龍泉寺近くの庄内川から水を取り入れ、矢田川の下を伏越^{ふせこし}と呼ばれる暗渠でくぐり抜け、お堀まで水路が掘られました。これが「御用水」です(図16)。この結果、水源のなかった堀川に、お堀を經由し庄内川の水が流入するようになりました。御用水は、名古屋城外堀の北東端から流れ込みます。また、水位を一定に保ち、余分な水を排するため、外堀の南西に「辰之口」と呼ばれる水路が造られました(図13:現在は船着き場の工事中です)。御用水は水質の悪化などもあって1972年に埋め立てられ、^{ごようすいあといえん}御用水跡街園の散歩道になりました。

1876年～1877年には犬山と名古屋をむすぶ舟運と農業用水の取水を目的に、大幸川を改修して流



図13 名古屋城辰之口



図14 水分橋庄内用水元枵



図15 三階橋伏越

路を付け替え、守山区水分橋で庄内川から分岐し、矢田川の下を伏越して堀川にそそぐ川がつけられました。この川は担当した技師、黒川治^{はるよし}憲の名前から「黒川」と呼ばれています。今の水分橋のたもとに元枵中樋口(川から取水する施設:図14)を設けて南に水路を掘り、三階橋の北で川村(守山区)から流れてくる御用水と合流して、矢田川は伏越(水路トンネル:図15)でくぐり、南岸で堀川と結ぶ新しい水路と御用水や庄内用水などを分流させます。ここから御用水に沿って南西に水路を新設し、堀川に流し込んでいる大幸川につながります。これにより庄内川の水が堀川に流れるようになり、水勢、水量とも増えて堀川は常時船が通航できるようになりました。



図16 黒川の掘削 (URL2)

主な参考引用文献

- 嘉藤良次郎・桑原 徹, 1967, 名古屋市付近の新第三系・第四系. 日本地質学会地質見学案内書, 26p.
- 町田 洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄, 2006, 日本の地形5 中部. 東京大学出版会, 385 p.
- 村松憲一, 2007, 名古屋の大地とその生い立ち. 91p.
- 村松憲一, 2019, 愛知県の地質とジオサイト 第二版. 189p.
- URL1: Web サイト 次世代デジタルライブラリー 尾張名陽図会
- URL2: Web サイト 大名古屋暗渠録